

2023/6

河合文化教育研究所の閉鎖に伴い活動の場から去ることの連絡

西川祐子さま

新緑の五月から梅雨入りの蒸し暑さがつづく今日このごろですが、お変わりなくお過ごしのことと存じます。

さて、私ごとで恐縮ですが、この春、35年間かかわってきた河合塾・河合文化教育研究所(以下、略称・文教研)を、3月末の閉所をもって活動の場から去ることになりましたので、そのご報告をかねてご挨拶を申し上げます。

という書き出しでようやく挨拶文を送り届けることができました。3月に河合塾との契約が終わりましたが、最低限の資料と文教研の出版物などは河合塾で保管することにし、4月いっぱいには2~3千冊の書籍の処理をしました。

やはりその片付けの疲れが出たのか、5月は休養の期間としました。6月に入ってようやくケリをつけたということです。しかし、もう少し、数回にわたり保管された資料などの整理に行くことになりそうです。若い友人たちがこの1年ほど、うまくローテーションを組んでいるかのように次々と現れて文教研整理の作業を手伝ってくれました。

取り急ぎご連絡します。

#### 【以下、挨拶文】

文教研の閉所については、「閉所のご挨拶」と京都新聞に掲載された「予備校文化」発信 歴史に幕」2023/3/20 夕刊1面 をお読みいただければ幸いです。<https://bunkkyoken.kawai-juku.ac.jp/>

じっさい当初からの主任研究員であった倉田令二郎(数学基礎論)、小田実(作家)、1994年にあらたに迎えた木村敏(精神医学)、谷川道雄(東洋史学)、中川久定(仏18C思想学)、廣松渉(哲学)、その後の長野敬(生物学)、丹羽健夫(教育学)の各氏がここ数年、相次いでなくなり、昨年の暮れには敬愛する渡辺京二さんが92歳の人生の幕を閉じられました。また、河合塾の文化活動を中心に担ってきた牧野剛、茅嶋洋一講師もなくなり、もはや活動の歴史的役割をすませたという判断になりました。

私は主に河合塾首都圏の「文化講演会(エンリッチ講座)」を担当してまいりました。その間、のべ800人ほどの多様多彩な講演者たちを東京・神奈川・千葉・埼玉の10数校舎に招き、1990年代は外部の公共ホールを利用して「激励コンサート」も催したことがあります。その「ねらいや位置づけ」として、【「もう一つの教育」から見えて来ることーエンリッチ講

座の場合】『河合塾における「予備校文化」とは何だったのか』2022/2 にまとめました。

<https://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/>

そして毎年、実施したエンリッチ講座の内容コメントを書き、生徒の感想文とともに小冊子にまとめてきました。その中で印象的なものを再録してまいりましたが、特に「中村哲さん、関野吉晴さん、河野義行さん」のページをコピーしましたので、生徒の反応なども併せてお読みくだされば幸いです。また、ネット上にも掲載しております(1997-2019)。「東日本地区(河合塾エンリッチ講座) - 河合文化教育研究所」で検索されると見つかります。

[https://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/symposium/folder789/post\\_71.html](https://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/symposium/folder789/post_71.html)

続いて、河合塾の牧野剛講師の子どもの頃を語った冊子をお送りします。彼は1990年代に「日本・中国・韓国の統一試験の比較」を河合塾の衛星放送をつかって「シンポジウムを実況中継する」という実行力を持った全国的な講師で、テレビの教育シンポジウムにも何度も出演していて、私は随分お世話にもなりました。2000年には世紀を越える記念として新幹線車両を借り切って博多・広島・大阪・京都・名古屋と東京への受験列車の企画も生み、私も牧野さん担当として博多から東京まで移動しました。彼が亡くなったときは名古屋で偲ぶ会をおこない、展示などは私が担当しました。口絵の写真などご覧ください。河合塾の雰囲気がわかると思います。また河合塾の講師だった渡辺京二さんのインタビューを同僚がまとめ、解説した『夢と一生』2023/2 刊とその書評も同封します。

<https://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/researcher/makino.html>

最後に昨年春から秋にかけ、私が編集し、紹介文を書いた『予備校空間のドストエフスキイ』の書評もお送りします。これは河合塾の英語科を三十余年つとめた芦川進一講師によるものです。教え子には、「ハンセン病患者の詩集」復活を企画実現した方、NHKの番組ディレクター、「一休禅師」の研究者、海外で活躍する教育学者などがいらっしゃいます。また、信濃毎日新聞の書評委員もその一人で、彼が書評したものも同封します。

[https://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/blogs/2022/1205\\_003571.html](https://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/blogs/2022/1205_003571.html)

3月まではネット上での「河合文化教育研究所」のサイト作りに没頭し、河合塾の文化活動の歴史もできるだけ掲載しましたので、そちらもご覧いただけるとありがたいです。

[https://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/plus/post\\_125.html](https://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/plus/post_125.html)

文教研の片付けにはもう少し時間がかかりますが、今後は30歳(1979)前後に自主出版した戦前の女性解放運動家「八木秋子」の個人通信「あるはなく」や著作集Ⅰ『近代の＜負＞を背負う女』、Ⅱ『夢の落ち葉を』、Ⅲ『異境への往還から』などの資料をサイト上の「玄南工房－八木秋子の世界」<https://gennan.sakuraweb.com> でまとめていきたいと考えています。また、1970年前後の「八木秋子日記抄」600頁もあらかたできていますが、それに

も目処をつけたいと思います。

とはいえ、私の現在の日常は「ミニトマト、オカワカメ、キュウリ、ナス、シシトウ」など家庭菜園での野菜作り、地元で稽古を重ねている太極拳(簡化24式、32式剣、伝統楊式、太極連環扇)を通じての「身体との対話」を中心に動いています。

これまでも皆さまのご厚情の下で日々暮らしてきましたが、今後も変わりなくお付き合いくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

2023/6